

〔巻頭言〕

これからの種豚について

㈱サンエスブリーディング 下 山 安

とにかく暑い日が続いています。さすがに体温以上というのは人も豚も堪えます。東北地方で梅雨時期なのに暑かったり、各地で局地的な大雨や突風、火山活動もひそかに活発化しているようで、世界的にも同様の現象が起きているのは不気味なことです。単純にCO₂による温暖化ということではないのかもしれませんが。このような異常気象が続くとすると梅雨がなくなり、秋も短く四季の移ろいを味わう楽しみが減ってしまい寂しい気がします。

さて、豚業界においてもCSF、PRRS、サーコなどの病気との闘い、世界情勢による飼料原料と燃料の高騰など逆風が吹きまくっている状況です。畜産業界全体が厳しい状況です。

ここ数年国内の種豚改良は進み総産子数15頭以上、年間離乳頭数で30頭以上を可能にし、海外のハイブリッドや多産系LWに近い繁殖能力となっています。またFCとDGをバランスよく改良し上中物率を高めて利益率の高い枝肉を生産し生産効率の高い種豚となっています。近年の改良方法はBlup法の利用は当然のことながら、海外でさまざまなDNAマーカーが開発されたことで国内でもゲノミック選抜が可能になり、各種豚メーカーは繁殖性の向上と肉質や背脂肪を一定の厚さに保ちIMFを強調したテーブルミートと

しての付加価値と、強健性・体型・高病性など扱いやすい種豚をバランスよく改良していく方向性となっており、それは科学的根拠に裏打ちされた説得力のあるものとなっており素晴らしいものです。

一方国内には海外の多産系の血液が入っていない系統の種豚もいます。背脂肪が厚めで肉質が良いとされ足腰が強く肋張りもあり強健性があるといわれている系統です。繁殖成績は多産系には劣るものの、強健性があるため更新率を抑え、高産次まで安定した成績が得られます。したがって母豚当たりの生涯の生産性をみた場合、実は多産系とあまり差はなく、良質な豚肉が生産されることになるのではないかと思います。

今後の養豚経営は生産効率の高い種豚を大規模に飼養していく方向になっていくでしょうが、強健性があり高産次まで飼養できるような種豚にも生き残る道はあるのではないかと思います。改良については優れた改良技術が進んでいる一方で見落とされている選抜項目もあるのではないかと思います。また、国内に残されている貴重な系統をどう残し、どう生かしていくかということも必要と感じています。

2023年8月

「大暑 土潤溽暑 (つちうるおうてむしあつし)」